

特集にあたって

新百合ヶ丘総合病院脊椎脊髓末梢神経外科 谷 諭

髄液漏という疾患概念が注目を集めて久しくなりました。この疾患は「脊椎硬膜に裂け目（穴）ができている」が基礎病態ですが、その病態を共有する疾患は多くありそうです。その1つは、脳表ヘモジデリン沈着症を生じ得る硬膜欠損部からの血液成分のくも膜下腔への流入でしょう。一方、硬膜外に嚢胞を形成したり、はたまた脊髓そのものが陥入するような状態（脊髓ヘルニア）も知られていましたから、このような病態を *duropathy* と包括することが提唱されています。まれとはいえ、このような *pathological entity* が提案されたことで、硬膜には病気があるということは間違いありません。

考えてみますと、われわれ脊椎脊髓外科医は、骨、軟骨、靱帯という脊椎を構成する組織と、脊髓、神経という神経組織はこれまで扱ってきたわけですが、その脊椎と神経組織の境をつくっている硬膜の病変はあまり注目されませんでした。硬膜は、動く臓器である背骨の中でも、伸びたり縮んだりダイナミックな動きをして、脊椎の悪性新生物の浸潤から神経組織をガードしてくれる組織であります。悲しいことに、手術の際には、硬膜は「縫合すれば、適当につくであろう」と変に信頼された組織ですが、そこにも落とし穴（本当に穴）もあるかと思えますし、われわれが日頃、手術で必ずつくっている硬膜外の癒着にも、動く臓器の中では問題が起り得ると考えるのが当然ではないでしょうか？

この特集では、脊椎硬膜をあらためて見直してみ、近年提唱された *duropathy* という硬膜に穴があいている状態のみではなく、硬膜そのものの疾患・トラブルまで最近の知見を著名な先生方に解説してもらいました。

内角先生には脊椎硬膜の臨床に即した *microsurgical anatomy* を、柳下先生には硬膜病変の画像診断を詳細に、高井先生には硬膜欠損や他の病因からの持続的出血による脳表シデローシスを、中島先生は同様に硬膜に穴があるものの、脊髓が嵌まり込む脊髓ヘルニアを、高橋先生には硬膜の穴からの髄液漏出について、長谷川先生から肥厚性硬膜炎という臨床家にとっては不思議な病態を解説していただきました。

先ほど述べたとおり、動く組織である脊椎の中での硬膜がどのような立ち振る舞いをするかは依然不明な点もありますが、*duropathy* などでは、硬膜外に存在する靱帯と硬膜そのものの癒着があると、運動という要素で脊椎との間に引きつれを起こし、その部位の硬膜に裂け目ができるのではという推測もされており、大変興味深い分野であると思っています。僕の気持ちとしては、硬膜はとても重要な役割を担っていることをこの特集であらためて読者の方々に再確認していただきたいです。その認識をもって手術に臨んでいただければ、これからの脊椎脊髓手術は、より質のよいものになるのは間違いのないと思います。